

「考古遺物（鉄製品）の保存処理・公開」事業の進捗状況について

廣瀬憲雄（事業責任者）

総合郷土研究所では、2019年度より3年間の予定で、「考古遺物（鉄製品）の保存処理・公開」事業を開始した。この事業は、総合郷土研究所が所蔵する出土鉄製品のうち、希少価値があり、学術的にも特に重要なものを中心に保存処理を実施し、所内での保管体制を整えることを目的としている。対象とするのは、寺西一号墳出土大刀10本のうち、大刀1～3の3本である。

前年度、大刀1に未知の象嵌が発見されたことにともない、当初2年を予定していた保存処理期間が3年に延長されることになった。そのため、今年度は大刀の保存処理を継続し、象嵌のない部分については処理を終えるとともに、象嵌のある部分については、来年度に象嵌の研ぎ出しと破片の接合を行うための準備をする予定である。

前年度は、寺西一号墳およびその出土遺物を検討する研究会を3回開催したが、今年度は新型コロナウイルス流行の影響で、開催は1回にとどまる見込みである。今年度の研究会は、保存処理にあたっている元興寺文化財研究所の初村武寛氏をお招きして、現段階における保存処理の進捗状況と、保存処理にあたって得られた知見をお話しいただく予定である。また、その際に、現在は愛知大学総合郷土研究所と豊橋市文化財センターに分割して保管されている、寺西一号墳の出土遺物を研究会の会場に集め、関係者に披露するとともに、遺物の総合的な検討を行う予定である。

最終年度となる来年度は、研究成果を披露するシンポジウムを実施するとともに、研究成果を報告書としてまとめる予定である。ただし、新型コロナウイルスの流行状況によっては、適切な形での計画変更を行う必要が出

てくるであろう。豊橋市文化財センターなど関係機関とも連携しながら、適切に対応していきたい。